

教育実習を終えて

日本語日本文学科 4回生

松本美波

母校での三週間の実習はあっという間に過ぎてしまったという気がします。とても学びの多い、かけがえのない三週間となりました。その中で私が学んだことは三つあります。

一つ目は、「常に生徒のそばにいることの大切さ」です。校長先生が初めの講話の時に、常に生徒のそばにいるからこそ見えてくるものがあり、それが些細なことでも気付くことが大切だとおっしゃっていました。教師という仕事は常にやらなければならない仕事如山積みで、常に生徒のそばにいることは難しいかもしれないけど、そんな気持ちですずっと子どもたちと関わっていきたいと言っておられたように、先生方は休み時間も職員室には戻らず、同じフロアにいて生徒たちを見守り、コミュニケーションを取りながら、同じフロアで同じ時を過ごすということを徹底しておられました。先生方はいつ休んでいるのだろう、いつ教材研究をしているのだろうと思うぐらい目まぐるしい毎日を過ごしており、その中でも一つひとつ着実に仕事をこなし、生徒の前では疲れた顔や暗い顔をせず、明るく生徒たちと接していたことが印象的でした。日頃から先生方がこういった努力をしているからこそ、生徒と教師の信頼関係が顕著に表れているのだなと感じました。また、それが一人ひとりの生徒を大切にすることにつながってくるんだということを感じました。

二つ目は、会話のキャッチボールの大切さです。多くの先生方に、「授業中にもっと生徒と会話のキャッチボールが楽しめるといいね」と指摘を受けました。初めの頃は、計画通りに授業を進めることで手いっぱいになってしまい、全く余裕がありませんでした。しかし、授業を重ねていくうちに、何気ない生徒との会話も楽しめるようになり、授業に立体感が始めると、私自身も授業をしていて楽しくなり、生徒一人ひとりの表情を見ながら授業を展開することができました。一つの話から生徒の興味関心を引き出すためには、教師自身が幅広く物事を知っていることが必要になってきます。だからこそ、教師は学び続けなければいけないんだということを強く感じました。

三つ目は、毎日が反省と改善の繰り返しだということです。あるクラスでは授業が上手くいっても、違うクラスにいくと上手くいかない、ということもありました。クラスによって雰囲気や生徒の実態も違うので、各クラスに応じた進め方をしていくことが大切だと思いました。でも、共通しているのは、こちらが一生懸命伝えようとする、生徒は分かる、理解しようとしてくれます。そして、楽しい授業であれば、より積極的に参加してくれるということです。毎日、授業が終わってから反省と改善をし、よりよいものを作り上げていくことが大切だということを、身をもって感じました。

この実習期間は本当に学びの多い毎日、実習に来なければ気付かなかったこと、考えなかったこと、知らなかったことがたくさんありました。教育の現場に立つことの難しさ、その反面で生徒の成長を一番近くで見守ることのできる存在としての喜び、人と人との繋がりを濃く感じることでできた三週間でした。最後の授業の時には生徒から感謝の言葉をもらいました。その時の感動と喜び、また、生徒たちと別れる時の寂しさはこの先ずっと忘れられないと思います。この三週間はこの先ずっと忘れられない、私にとっての宝物となりました。この経験を良い経験だけで終わらせず、今後の教員生活に生かしていきたいです。

最後になりましたが、教育実習を受け入れていただき、手厚いご指導をいただいた母校の先生方、本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

英語英米文学科 4回生

小林 たくみ

私は中学校で3週間の教育実習をさせていただきました。姫路市は実習校を自分で決めることができず、教育委員会から4月の下旬に実習先が発表されるので少し焦りました。また、実習前の事前打ち合わせもありましたが、自分が授業をする単元などを詳しく知ることができなかつたので、始まる前に授業の準備ができませんでした。したがって、事前準備ができる方はなるべく自分の考えをまとめておいたり指導案を作っていた方が余裕が出ると思います。

私の担当クラスは1年1組で、男子生徒より女子生徒の方が多いいクラスでした。学年の中でも明るく元気いっぱい、男女仲の良い、本当にいいクラスでした。学年は全6クラスで、クラスの中に1人か2人程度発達障害の生徒が在籍していました。その中で私は1、3、5組の授業を担当しました。最初は不安でいっぱいでしたが、積極的に話しかけに行ったり、生活ノートを点検させてもらったり、休み時間や放課後を利用して生徒とかかわる時間を作っていくことで、クラスだけでなく学年の壁を超えて多くの生徒とかかわることが出来ました。また、私は空き時間を利用して発達障害の生徒のクラスや学校に来れても教室に入ることの出来ない生徒のクラスを訪問し、かかわる機会も設けました。学年によって表情や発言、態度が全く違い、学ぶことも多いので、ぜひ時間をつくってより多くの生徒とかかわる時間をつくってみてください。

授業については、私は3日目から3クラス全ての授業実習をさせていただきました。3週間で30回近い回数の授業を行うことができたおかげか、学ぶことも反省点も本当にたくさんある充実した実習を経験することができました。また、授業実習と並行して様々な先生方の授業を見学させていただいたので、授業の展開方法や導入方法なども学ぶことが出来ました。授業を行う上で、私は生徒一人ひとりの発言や考え方を尊重できる授業作り、また生徒に「英語って楽しい」と言ってもらえるような授業作りを目標としていました。それらを踏まえ、英語が苦手な生徒にも授業に取り組みやすいような導入を行ったり、生徒が発言しやすいような雰囲気作りに努めました。その中で一番苦戦したことは、まさに「英語」です。1年生の基本の文法を学習する中で、私たちがこうなることは当たり前だと理解し覚えている文法事項を、生徒にどうしてこうなるのかという細かいところまで改めて説明するのが本当に難しく、毎日英語の文法書を見ながらどういう風に説明すると一番わかりやすく伝わるのかを考えていました。その3週間の葛藤もあってか、研究授業では緊張でミスも多くありましたが自分の中では一番楽しく、満足できる内容の授業を行うことができ、最終日には多くの生徒から「先生の英語の授業を受けてから英語が好きになりました」と言われました。また、姫路市は道徳の授業も行うのですが、この研究授業では生徒一人ひとりの意見を聞きすぎてしまい、授業案の半分しか行えないまま授業が終わってしまいました。この研究授業を通して、自分の専門教科ではない分もっと教材研究が必要だと痛感しました。この失敗や先生方から頂いた意見を通して学んだことを、また道徳の授業を行う際に生かしていきたいと思えます。

この3週間の教育実習を通して、本当に多くのことを学ぶことができました。英語のことだけを学ぶのではなく、より多くの生徒と関わり、生徒のことを知りたいと思い臨んだ教育実習で、自分の時間を利用して行動に移したことにより、今の中学校の様子や、生徒一人ひとりのことを知ることができました。

また、今振り返りこのように思うことができるのも、多くの先生方や一緒に頑張った実習生の支えや、毎日支えてくれた家族のおかげだと思います。3週間必死で生徒と英語と向き合い、努力したおかげで、周りの支えがあるからこそ今があることや、感謝することの大切さを改めて痛感することができました。今回の実習で学んだことを活かし、教師になっても初心を忘れず努力し続けたいと思います。



教育実習を終えて

神戸国際教養学科 4回生

板谷 友紀子

母校での3週間の実習は大変短く、あっという間に終わりました。毎日が忙しく、教員という職業の大変さを実感しました。私は中学3年生の英語を担当しました。1週目は授業の見学が多く5日目に初授業をしました。英語の授業以外には、生活ノートや提出物の確認、朝のHRや掃除の時間、給食時間の監督をさせていただきました。教育実習において学んだことはたくさんあります。教師になるには、授業の準備、生徒や教員とのコミュニケーションを取ることはもちろん大切です。細かな指導案・伝える授業作り・雰囲気作り・大学の授業で学んだこともできるようにしなければなりません。その中でも、私が重要だと感じたことが2点あります。

まずは、「アンテナを張り、気付く力」です。例えば、授業を進めるにあたって、約何割の生徒が理解しているか、ということに気付けるかどうかです。半分以上の生徒が理解していない状況で、授業がいくら進んでも、生徒の学力は伸びません。生徒の反応や表情から、授業のやり方と進度を考える必要があります。また、職員室では、何をすることによって効率が上がるか、手伝えることがあるか、常にアンテナを張ることが大切です。そうすることによって、自分が学ぶ時間ができます。担当の教員に教えてもらう時間が増え、自分の授業準備ができました。授業中・休み時間・給食や掃除の時間の生徒の様子や態度・先生方の動き等にいつでもアンテナを張り、何をすべきか気付くことができれば、指導案作成や授業作りに活かされることが多くあります。

次に、重要だと感じたことは「授業の中での生徒の声」です。授業は生徒がいて成り立つものです。更に言うと、生徒の意見や声があってこそ、授業です。今では当たり前の事ですがこの実習を経験するまではきちんと理解していなかったと思います。授業中の生徒の反応や質問は予想の範囲外のものもあり、私の説明の仕方や進度に問題があったのだと感ずることもありました。しかし生徒たちの声が無かったら、私から一方的に授業をするだけで、授業が上手くいっているのかもわかりません。わからないことを素直に聞いてくれる生徒、反応を示してくれる生徒に感謝しました。このことから、私は授業で生徒の意見、声を引き出すように努力しました。そのための話術やスキルは、教育実習中に英語以外の教科の先生方からも吸収しました。

3週間の教育実習で、大きく成長することができました。慕ってくれた生徒やご指導して下さった先生方に感謝すると共に、この経験を糧としてこれからも成長し続けていきたいです。

教育実習を終えて

史学科 4回生
星野 恵利

母校である中学校で3週間実習をさせていただきました。配属クラスは2年生、授業クラスは1年生となりました。配属クラスと授業クラスが異なることに少々戸惑いはありましたが大変学ぶことの多い濃い教育実習でした。実習が始まる前は3週間は長いと感じていましたが、いざ実習が始まると本当にあっという間に過ぎていきました。初日は楽しい反面不安で緊張した部分もありました。全校集会のときに代表であいさつをしたときに大勢の生徒に見られ、実習に来たんだ、と、改めて気を引き締めたのを覚えています。

1週目は、授業見学が中心となりました。指導教官の先生の授業はもちろん、他教科の先生方の授業もたくさん見学させていただきました。その中で生徒が授業に興味を持つような導入をすることの大切さ・発問の仕方や話し方などとても多くのことを学びました。また、朝のHRや連絡帳のコメント・学級通信など教師の授業以外の仕事も行いました。多くのことをこなしていく日々は本当にあっという間でした。

2週目からは、授業実習が始まりました。初めての授業の前に緊張してガチガチだった私に指導教官の先生が「授業の初めに生徒に自分の気持ちを伝えてみて」とアドバイスをしてくださいました。先生のアドバイス通りに授業の初めに自分の気持ちを伝えると、生徒たちは説明の時は真面目に聞いてくれ、発表の時は元気よくしてくれました。この2週目は自分が思っていた通りに授業ができ嬉しかった日と思うようにいかず苦しんだ日に分かれました。時間配分と発問の仕方がうまく出来ず悩みました。

正直この週の木曜日は授業をしたくないと思ったほどです。自分の問題点を解決しようとするあまり生徒のことをしっかり考えていなかったことを本当に後悔しています。恩師に言われた「教えなくちゃという考えだけでは生徒はほとんど反応しない」という言葉を痛感することになりました。ちょうどこの日の次が市内の中学校が集まる恒例の行事がありました。そこで、たくさん話していく中で授業以外の生徒の姿を見ることができました。一緒に話すことはもちろん行事をやっていくのはとても楽しかったです。生徒も楽しそうでした。授業も私が楽しんでやらなければ生徒は答えてくれないし、楽しくもないのではないかとこの行事で生徒と触れ合う中で気付くことができ、最終週に向けて後ろ向きで余裕のなかった私の考えが、前向きになるきっかけにもなりました。

3週目は、2週目の反省をふまえて生徒のことを考えて授業をすることに努めました。研究授業では緊張のあまり普段できていたことができなかつたことは本当に悔しかったです。まだまだ未熟なのだと痛感しました。今回の実習では、部活動での指導・生徒との接し方、授業面では発問の仕方がうまくできなかつたと思います。これらの問題点は、教師になった時の課題としていきたいです。3週間の教育実習は、つらいこと・苦しいことはたくさんありましたが、それ以上に楽しいこと・嬉しいこと・学ぶことが多くありとても充実していました。自分に足りないものにも気付くことができ今後改善していきたいと思います。精神的にも身体的にも成長し、1年生で授業したこと、2年生で授業したこと、毎日の連絡帳のコメントや生徒からの色紙は私の中で大きな存在となっています。

実習を終えて

教育学科 3回生

神田 早苗

「おはようございます！」緊張と不安でいっぱいだった初日、すれ違う子どもたちが元気よくあいさつをしてくれたあの笑顔が今でも忘れられません。

私の母校での4週間の教育実習は、期待と戸惑いから始まりました。実習を終えた今、心にあるのは、「教師になる」という決意です。

初日に、教頭先生から「教師として必要な資質」を3つ教えていただき、私はこの4週間でその3つの大切さを実感することとなりました。

1つ目は、「情熱を持って子どもに接すること」です。現場の先生方の子どもたちへの指導を見させていただき、「情熱」とは、「子どもたちを信じること」であると感じました。子どもたちが、鉄棒やリコーダーなどの苦手なことに失敗しても、何度でも挑戦している姿を実習中に数えきれないほど見ました。子どもたちが苦手なことから逃げないのは、先生が自分のことを「できる」と信じて待っていてくれることを知っていたからでした。先生方は、苦手なことに挑戦している人のことを褒め、できたときには一緒になって喜んでいました。先生が信じることで、子どもたちはどんどん成長していくのだと、子どもたちを見ていて感じました。私も、子どもたちの可能性を信じ、「情熱」を持って子どもたちと向き合える教師になりたいと心から思いました。

2つ目は、「授業力」です。実習前は「知識を教えること」が授業力だと思っていました。しかし、授業力の中で特に大切なことは「子どもが考える授業をする」であることに気がきました。私は、授業で子どものためと思いを、授業のポイントを言ってしまったり、子どもたちの言いたいことを私が先に言ってしまったり、答えを与えてしまったりしてしまいました。一方で、先生方はいつも子どもたちに「この作業に何分かりますか?」「どうしてそうなるのか考えましょう。」など、子どもたちが主体となって考えさせる問いかけを何度もされていました。子どもたちは、先生から指示がなくても、普段の中で、自分たちで考え、気付き、行動することが当たり前となっていました。教師は、知識を教えるだけでなく、子どもが自ら考えられる発問や働きかけをすることこそ大切にしなければいけないと気がきました。実習担当の先生からは、「教師はあくまで監督であり、ホームランを打ってはいけません。ホームランを打つのは子どもたちです。」「子どものためと思って親切なことをしているようで、実は子どもたちにとっては不親切なこともあります。」と教えていただきました。私は、授業で、子どもたちの考える力を奪ってしまっていたことを知り、とても反省をしました。子どもたちが自分で考え、答えを導きだせるような言葉かけや発問ができるような「授業力」を持った先生になりたいと思いました。

3つ目は「気力・体力・頑張る気持ち」です。実習中、寝不足が続いていた日、子どもたちに「先生、今日元気ないね。」「今日はあんまり笑っていないね。」と言われたことがありました。子どもたちは敏感に先生の表情や心情を感じ取ることを知りました。先生の表情で、子どもを不安にさせたり、子どもにも暗い表情をさせたりしてしまうことに気がきました。子どもたちの命を預かっている教師にとって、気力や体力を管理することはとても大切なことだと実感しました。また、子どもたちのために「頑張る気持ち」がなければ、教師という仕事はできないと感じました。この気持ちがなければ、私は4週間の実習をやりきることは出来なかったと思います。

この4週間、廊下ですれ違うたびに「頑張ってるね。」「元気？」とたくさんの先生方に声をかけて頂いたり、夜遅くまで授業計画を一緒に考えてくださったりと、優しくも厳しい先生方に、毎日支えられ、助けて頂きました。また、子どもたちには、私が教えるどころか、教えてもらうこと、学ばせてもらうことばかりで、苦しい日もしんどい日も、子どもたちの笑顔と元気いっぱいの姿に励まされてばかりでした。

私の目標である「子ども1人ひとりと向き合い、信頼される教師になる」ために、実習で学んだこと、見つけた課題を忘れず、努力し続けたいと思っています。子どもたちと過ごした4週間は、私の一生の宝物です。将来、教師となり、未来の子どもたちを育てていくことで、この感謝の気持ちを返していきたいと思いました。



教育実習を終えて

教育学科 3回生

濱本玲奈

私は教育現場で先生方から直接指導の仕方や仕事内容の教えられるというよりも、見て学ぶ事の方が多かった。自分の授業や児童との触れ合い方は手探りで探し、その都度、実習指導の先生からのご指摘を受けていた。実際の教育現場での1ヶ月間は本当に有意義なものであり、毎日が充実し、過ぎるのがあっという間だった。多くの思い出ができ、楽しいことが多かったが、その中には辛いことや悩むこともあった。しかし短い期間の中で、先生と児童の信頼関係、先生の児童に対する指導の仕方や先生方との連携、子供同士の関係性を見て多くを学ぶことができ、大変勉強になったと感じている。

実習を通して学んだことは、教師に求められるものが、『飽くなき研究心』と『体力』であるということだ。実習は、良くも悪くも自分の実力をつき付けられる。まず私は児童とコミュニケーションをとる上で、個性あふれる児童といかに上手く関わるかを考えた。毎日クラスの子全員と話すことや、児童のいいところを1つでも多く見つけられるように、挨拶や児童の言動や長所を、メモを取るなどしていた。また、休み時間毎に外に出たり、絵をかいたりなど遊ぶ時間を多くとったりもした。楽しいことが多かったが、私は体力があまりなく、毎日クタクタで週末はぐったりしていた。それを考えると、先生は毎日これ以上の疲労度があり、さらにやることが多く忙しいため、『体力』は大変必要なものだと思います、つけられるうちに『体力』をつけておくことは大切だと痛感した。

次に授業をさせてもらえるということで、指導案や教材作りに力を入れた。児童の実態を把握し、これらを自分の手で1から作らなければならないため、大変な時間と労力を要した。自分が授業をするということは、児童や先生の貴重な時間を割いて、自分の不十分な力の中で120%の力を出して授業に臨むということだ。また先生の進路状況に合わせて授業展開を考えるので、自分の好きなところを選んでやっていた大学の模擬授業とは全く違って難しかった。それに児童にはそれぞれ能力に差があり、指導案を簡単にすれば退屈な児童が出るし、難しくすればついていけない児童が出てくる。また、その日その時間の児童の気分でも反応が違ってくる。さらに障がいを持つ児童が参加する授業も存在する。このように様々な特徴を持つ児童を、先生1人で指導に当たるわけで、授業1つにしても大変な苦労があるのだと改めて知った。それに授業も毎回同じでなく、児童に合わせたスタイルで常に臨機応変に対応していかなければならない。だからこの時、教師には『飽くなき探究心』が必要であると感じた。しかしそんな苦労の先には、児童の笑顔や成長というものがついている。私自身、心が折れそうになった時、児童との触れ合いの中で気持ちが明るくなったり、頑張ろうという活力につながったりしたことが多い。児童にわかりやすい授業をとる気持ちも『飽くなき探究心』につながり、自分の指導力の向上にもつながると感じた。

教師という仕事は、児童の将来に携わることのできる素晴らしい仕事であり、大変なことも多いが、やりがいのある仕事だと実習を通して強く感じた。そんな素晴らしい職を目指す人には、教育実習は大変貴重な学びの場である。私は実習前に児童に毎日元気な挨拶をしようという目標を掲げ、実習に臨んだ。実習中に思ったことは、ただ行かないといけないからという理由で実習に行くようでは、教育現場での学びが浅くなり日が淡々と過ぎ去ってしまうということだ。実習に行く前になにを頑張りたいか目標を決めておくこと、失敗を恐れずやりたいことにチャレンジしてみることが大切だと考える。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

徳永早耶

私にとって教育実習での一カ月間は学びと発見の連続でした。教育実習での一カ月間は本当にあっという間で、頭を悩ますことやしんどいことも有りましたが、児童の笑顔や言葉からパワーをもらい、先生が温かく支えて下さったおかげで、中身の濃い非常に充実した一カ月を過ごさせて頂く事が出来ました。教育実習を通して学んだこと、考えたことを以下に述べていきます。

私が学校現場に立って最初に感じた事は、学校生活では全ての事象・全ての時間が児童にとっての大切な学びに繋がっているという事です。授業での指導はもちろんですが、授業外の生活上での指導が非常に多い事に驚かされました。その生活上での指導に最初はとても戸惑い、叱る、叱らないといった一つの事柄に関しても、自分の中のそうするか否かを判断する線引きが曖昧で、上手く指導する事が出来ないことがありました。その様な中で、教師は指導に関する一つのぶれない基準・軸というものを持っておかねばならないのだと身にしみて感じました。そうしなければ、指導に一貫性を持たず、最終的には児童が困ることになってしまいます。

他の先生方を観察して、先生方の行為には必ずその背景に“意図”があることに気付きました。それは何事にも“指導する”という視点を持って対応されているからだと考えます。私も指導の際にはそれなりに考えて言葉がけをしていたつもりでしたが、そこまで深く考える事が出来ておらず、“指導する”という視点は教師として常に持ち続けていなければいけないものであり、自分の考えの浅さを痛感しました。「その指導にはどの様な意味があるのか」「その指導は児童にどの様な効果を与えるのか」という疑問を、自分自身に対して投げかけ、自分の指導を省みる事を怠らないようにしたいです。現場の先生方を間近で見る事で、「児童を伸ばすには？」と常に考え続け試行錯誤を繰り返している先生方の姿を目にしました。それぞれの児童に合わせて、自分はどの様にして寄り添って行けるのか、ということ謙虚に考え続けることは教師として忘れてはいけぬ姿勢であると心に留めました。児童と共に学校生活の中に身を置く事によって、集団生活上での指導が児童の人間性や社会性・道徳性を培うために非常に重要な指導であることに気付きました。授業以外の指導を如何に重視し丁寧に対応するかによって、児童の人間形成の基礎となるものも変わってくるのだと考えます。私も教壇に立ったら、気を抜かず全力で児童と向き合っていこうと思います。

学校生活での中心は児童で、児童の事をよく知っておかねば児童一人ひとりに沿った指導はできません。私は児童理解を図るために、積極的に児童に関わり、その児童の特徴や気が付いた事を日々の記録に纏めることに取り組みました。そこで得た児童理解を授業実践でも活かす事が出来たと思います。授業内容としては、自分が思い描いていたものと現実とで大きなギャップがあり、課題が残るものとなってしまいました。しかし授業後には、「先生の授業がすき」と言ってくれる児童達の笑顔があり、それが私の次の授業に向けてのやる気に繋がりました。教師もまた児童に支えられているのだなと心から思いました。

実習では運動会という貴重な行事にも立ちあわせて頂きました。6年生の最後の組体操が終わった後の、先生と児童が共に涙を流し合っていた姿は、今でも心に残っています。児童と教師の心が通じ合った瞬間に胸が熱くなり、とても感動しました。その時、児童の成長に寄り添え、感動的な場面に立ち会う事が出来る教師という仕事は素晴らしい仕事であると強く実感しました。教育実習で学んだこと・考えたこと・改めて思えた教師になりたいという強い気持ちを忘れずに、児童の成長を担っていく者という責任と自覚を持って、今後の学生生活も一生懸命取り組んでいきたいと思っています。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

松浦 みゆき

私にとって、1か月という長いようで短かった教育実習は、改めて自分を見つめ直す機会になったと同時に、自分を支えてくれる方々へ感謝をすることの大切さを感じる事が出来たものとなった。母校実習と言えども、実習生が1人だったこともあり、楽しみよりも不安が大きかった初日。笑顔で元よく挨拶をしてみると、先生方も子どもたちも温かく迎えてくださった。担当クラスへ行き、先生が「今日からみんなと一緒に勉強をすることになります、松浦みゆき“先生”です。」と紹介をしてくださると、子どもたちはキラキラとした笑顔で「よろしくお願ひします。」と言ってくれた。挨拶が終わると、子どもたちはすぐに私の周りに集まって来て「先生、僕の名前はね〇〇〇だよ。」や「休み時間はドッジボールしよう。」と声をかけてくれた。とても嬉しくて、緊張や不安が一瞬で吹っ飛んで、これからの日々が楽しみになっていった。そして、担当クラスをはじめ各学年の授業を参観させていただく中で、小学校6年間の子どもの成長の早さと先生方の対応力の的確さを目の当たりにした。今までは児童として授業を受ける身だったが、教育実習は先生側・児童側から考えることが出来るため、授業に対してさまざまな視野が広がると思った。私は全7回授業をさせていただいたが、とにかく授業をつくることの難しさを改めて知った。“授業をつくる”と言っても、指導案・教材づくり・板書計画など実際に現場で働いていらっしゃる先生から直接教えていただける、決して大学では経験出来ない貴重なものである。教育実習に対する自分の考えの甘さと、“児童にとってもう1度の授業はない”という先生の言葉からも授業づくりの大切さを知った。しかし、教育実習の目的は、授業面だけ学ぶものではないと思っていた私は、休み時間は小学生の頃に戻ったように、走り回ったり、ドッジボールをして遊んだ。教頭先生から、「子どもと仲良くなるのは遊ぶことが1番」という言葉を教えていただき、まさにその通りであった。毎日外で遊ぶことで、元気いっぱいな子ども大人しい子ども、笑顔を沢山見せてくれた。実習中にきつい事があっても、その笑顔に救われたこと、今でも覚えている。子どもたちからは、「一緒に遊んでくれてありがとう」と言ってもらったけれど、私は逆に「たくさん遊びに誘ってくれて、たくさん遊んでくれてありがとう」と感謝の気持ちでいっぱいだった。こうしているうちに時間が経ち、教育実習3週目の金曜日になった。この日は査定授業であり、今までの授業の成果を校長先生をはじめ多くの先生方に見ていただく機会であった。不安で泣きそうになっていた私に、今まで指導して下さった担当の先生が「失敗しても大丈夫だよ。先生（私）が私たち（先生方）よりも上手な授業したら困るもん。」と笑いながら勇気付けて下さった。また、授業が始まる前、子どもたちが「先生の授業分かりやすいし、楽しいけん、今日も楽しみにしてるよ。」と言ってくれた。「私は1人じゃないんだ」と思い、担当の先生・クラスの子どもたちを信じて授業を行った結果、今までで1番楽しくて達成感を得られた45分となった。放課後の反省会でも、アドバイスをいただくと同時に沢山褒めていただいた。その中でも「子どもたちに向かう姿勢がいいね」「表情が豊かだったよ」と言っていたことが私の教育実習全てを表しているようで涙でいっぱいだった。

私の教育実習は、母校の小学校でなければ充実したものにならなかったし、夜遅くまで丁寧にご指導して下さった担当の先生・未熟な私を“先生”として見てくれた子どもたち・「お疲れ様」と優しく声掛けをしてくださった先生方に出会えたことは、一生の宝物である。一生懸命やった分だけ必ずいい結果で戻ってくることを実感出来るのが教育実習である。不安な事も多いかもしれないけれど、“笑顔と元気”を忘れずに、子どもたちには配慮もしつつ本気でぶつかること、先生方には積極的かつ謙虚な姿勢を忘れずに思い切り楽しんで毎日を過ごして欲しい思う。

教育実習で学んだこと

教育学科 4回生
白井朝子

私は幼稚園で4週間の教育実習をさせていただきました。実際の教育現場では毎日が発見と驚きの連続で学べることがたくさんあり、自分自身が成長出来たと感じられる実習になりました。特に学んだことは「援助方法はたくさんある」ということです。

もし給食で好き嫌いをしている幼児がいたら、励ますというのが今までの私の中での考えでした。「大きくなれないよ」「食べられたらかっこいいな」など、励ましの声掛けや応援をしていたと思います。しかし、実習させていただいたクラスの担任の先生はいろいろな角度から援助されていました。実習が始まってすぐの頃、給食のメニューで茹でインゲン豆が出た日がありました。残念ながら苦手な幼児が多かったようでクラス中で食べ残しが目立ちました。給食時間の途中、先生はある幼児に「〇〇くんは食べられないでしょ。食べたら先生びっくりするもん。食べないでいいよ。」とおっしゃいました。すると、その幼児はパクッとインゲン豆を口に運び「先生食べたよ！」と報告しました。わざと他のことをしていた先生が「え！うそだ！もう一回やってみせて！」と返すと幼児は「もう食べられるよ！」とパクパク食べだしました。また、先生がその幼児が食べられたことを大きな声でクラスに伝えることによって他の幼児も食べてみようとして挑戦し、最終的に苦手だったインゲン豆をほとんどの幼児が食べられていました。その様子が私にはとても衝撃的であり新しい発見でした。幼児教育には様々な方法があり深い幼児理解があるからこそ、それは実践に移せるのであると学びました。同時に今までどれだけ視野が狭かったか痛感することができました。

また、その給食の時間の中で「連続的な幼稚園教育だからこそ目先のことだけではなく、長い目で見て幼児の成長とかかわっていくことができる」ということも学びました。いつもは全く食べない幼児がそのクラスの雰囲気ややる気が出て2ミリほどにちぎったインゲン豆を食べて私に報告してくれました。あまりの小ささに「もっと食べられるかも、頑張れ！」と励ましの声掛けをしてしまった私に対し、横で見ていた先生は思いっきり幼児を褒めました。幼児はそれ以上食べませんでした。きっと今後に繋がる自信になっただろうと確信し、褒めること、認めることの大切さを実感出来ました。

教育実習での経験は教諭になりたいとより強く決心することができ、忘れることのできないものとなりました。教諭になったら自分の中の常識にとらわれることなく新しいことを受け入れられる姿勢で取り組みたいと思います。実習先の園長先生をはじめご指導いただいた先生方、そのほか教育実習でお世話になった皆さんにお礼申し上げます。ありがとうございました。

教育実習を終えて

教育学科 4回生

河津 柚花

私は一年間を通して、大学付属の幼稚園で教育実習をさせて頂きました。私は5歳児年長クラスに入らせて頂き、本当にたくさんの方に気付いて頂き、学ぶことが出来ました。実習が始まったばかりの頃は、不安と緊張でいっぱいでしたが、明るく元気いっぱいの笑顔あふれる子どもたちと関わることで、緊張もほぐれ、充実した日々を過ごすことが出来ました。そして実習での多くの学びの中でも、私がこれからは特に大切にしたい、心掛けていきたいと思ったことを三つ述べます。

一つ目は、子どもたちと関わる上での保育者の援助や言葉かけです。子どもたちは日々の生活で多くのことを学び成長していきます。子どもたちがより成長していくためにも、様々な活動の中で、保育者がすぐに答えを出すのではなく、まず子どもたち自身が考えてから行動出来るような言葉かけや援助をしたり、出来るだけ、子どもたちが自分で出来ることは見守り待たせたりするなど、子どもたちが主体的に活動できるように関わることの大切さに気付きました。また、子どもたちの成長や小さな変化にも気付いて、共に喜び合うことで、その子の自信や次の活動への意欲にも繋がっていくということも改めてわかりました。そして、保育者の援助や言葉かけが、子どもたちの興味・関心を広げたり、成長のきっかけに繋がったりすることを実感しました。子どもたちにとってより良いことを常に考えながらこれからも関わっていききたいと思います。

二つ目は、子どもの気持ちに気付いて、その気持ちを受け止めて、寄り添うことの大切さです。私は実習の中で、全体での活動よりも自分の好きな遊びをしたいという気持ちが強く、全体の活動に入るのが少し困難な子どもに関わることがありました。その時、好きなことがしたい気持ちを受け止めながら、なぜ全体の活動をしたくないのかという理由をしっかりと聴きました。そして、無理に参加させるのではなく、その子に合った援助を考えながら全体の活動に興味をもてるように関わりました。すると、最終的には子ども自身が好きな遊びへの区切りをつけ、全体の活動へ進んで参加していました。この経験から、どんな時でも、目の前の状況だけで判断するのではなく、まず、なぜそのような行動や言動をとっているのかという子どもたちの気持ちを考えて援助や言葉かけをしていくことが大切であると感じました。また、保育者が自分の気持ちに気付いて、寄り添ってくれると子ども自身が感じたとき、それが保育者への安心感や保育者との信頼関係を築くことにも繋がるということも、子どもたちと関わる中で実感しました。

三つ目は、子どもと同じ目線に立って行動することです。同じ目線に立ち考えることで、子どもならではの柔軟な発想から多くの発見がありました。また、子どもたちと同じ状況と一緒に活動したり、気持ちを共感したりすることで、より子どもたちにとって身近な存在として関わる事が出来ると感じました。

一年間を通して実習をさせて頂き、自分の未熟さや幼稚園教諭という仕事の大変さや難しさを実感しました。しかし、それと同時にこの仕事へのやりがいや魅力、長期間の実習であったからこそ、様々な時期の子どもたちの成長の様子も感じる事が出来、とても貴重で、充実した経験を積むことが出来ました。この実習で学んだことをしっかりと身に付け、これからの自分の保育に活かしていけるよう、努力を惜しまず頑張っていきたいと思います。

そして最後に、本当にたくさんの貴重な経験をさせてくれた子どもたち、お忙しい中、丁寧に指導して下さり、多くの励ましの言葉をくださった先生方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

家政学科 4回生
内山 なつみ

スーツ姿で母校の正門をくぐったときは、懐かしいような新鮮なような、なんとも言えない気持ちでいっぱいになりました。教育実習は、楽しみよりも不安の方が大きいままで迎えたように思います。

私は母校の高校で3週間の実習をさせていただきました。1年生しか家庭科の授業はないため、授業は1年生9クラスのうち7クラスを担当させていただきました。クラス担任は、指導教諭が担任している、3年生のクラスに入ることになりました。同じ高校生とはいえ、中学校を卒業したばかりの1年生と、進路決定を控えた3年生とに同時に関わっていく中で、両者の雰囲気の違いには驚かされてばかりでした。

最初の一週間は、なにより学校の生活リズムについていくことで必死でした。朝のSHから昼休みを挟んで7時限までの授業、清掃が終わるとすぐに帰りのSH、放課後へと、時間は瞬く間に流れていきました。指導教諭や他教科の先生の授業もたくさん参観させていただき、先生と生徒の組み合わせによって、同じ授業はひとつもないことに気付かされました。そのなかで、廊下や職員室での先生方、生徒たちの会話や立ち振る舞いなど、とにかく気付いたことはメモをとるように心がけました。

二週目からは、いよいよ授業実践となりました。指導教諭はパワーポイントやタブレットも取り入れた授業をされていたので、私も同じ形をとることにしました。その結果、板書のスピードの遅れは少なく済みました。なにより感じたことは、50分間という時間の短さです。伝えたいことがたくさんあるのに、うまく説明できず、あげく生徒たちの「よくわからない」という顔がはっきりと見え、自分にもどかしさを感じる場面が多くありました。授業をする上で大切なことは、まず自分が一番に内容を理解しておくことだと思います。そして、メモ書きなどに頼らず、生徒と同じようにワークシートとパワーポイントだけを頼りに授業をすることで、余分な説明が削ぎ落とされた、わかりやすい話し方ができると思いました。ポイントを押さえていくにも、慣れは大切だと思います。

三週目になると、生徒の前に立つことにも慣れ、生徒の顔をしっかり見ながら、反応を楽しんで授業ができるようになりました。生徒の興味を引くような導入・話し方・助言の仕方など、教師側の働きかけひとつで、生徒の授業態度や理解度は大きく変わります。また、生徒たちが一教師として私を見てくれていることが実感できるようになり、この職業の魅力に改めて気付かされました。

忙しい中、授業を観にきて助言をくださった先生方や、顔を合わせるだけで元気をくれた実習生たちのおかげで、充実した3週間になりました。母校で、恩師である先生方からもう一度学ばせていただいたこと、後輩である生徒たちから素晴らしい経験と笑顔をもたらしたことは、四月から始まる教師生活において、大きな支えになると思います。わからないことや不慣れなことが多くてあたりまえ、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢を何より大切にしていきたいです。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程 4回生

中尾美聡

私は母校の小学校で、5日間という短い期間ではありましたが教育実習に行かせていただきました。小学校に栄養教諭の先生はおらず、主に3年生の担任の先生から授業や子供たちとの関わり方などを教わりながらの実習でしたが、給食センターを訪問する機会を設けていただき、栄養教諭について考えを深める有意義な時間を過ごすことが出来たように思います。その中で、私が実習で大きく分けて2つのことを学びました。

1つ目は、栄養教諭は担任をもてないからこそ、児童生徒との関わりを積極的に求めていかなければならないということです。栄養教諭は担任をもてず、食に関する指導をさせていただく機会も限られています。そのため、児童生徒との信頼関係を築くためには、休み時間や給食の時間を活用することが重要であると気付きました。実習中も自分から児童と関わっていこうと思い、休み時間には運動場に出て遊んだり、廊下ですれ違う時には大きな声であいさつをしたり、できるだけ多くの児童とのふれあいを求めていきました。児童との直接的な関わりを通して、個々の児童の性格や考え方が分かるようになり、それをヒントにしながら信頼関係を築き上げていくことができるようになるのではないかと感じました。

2つ目は、教材研究の重要性です。私は3年生で「たべものはたらき」についての研究授業をさせていただきました。授業で児童たちは疑問などを口々に発言します。そういった発言に耳を傾け、授業を行う上でヒントになるような発言を拾っていくことで、授業内容に深みが出るということを実感しました。そのためにも教材研究でより多くの知識を栄養教諭が身に付けておくことが必須であり、情報収集なども日々行う必要があるのだと分かりました。また、視覚的に訴えかける媒体を利用したり、児童の興味関心を引き出す工夫をすることの大切さも理解できました。研究授業の前日に、3年生と保護者で給食センターを見学し、給食を食べるという校外学習があったため、研究授業ではその日の給食を取り上げて授業を行いました。児童にとって、「給食センターで食べた給食」という印象深いものであったため、その分興味関心を引き出しやすかったように思います。このように、単に給食を活用するだけでなく、どの日の給食をピックアップするかも考慮していかなければならないと感じました。

実習に行く前まで、「栄養教諭」という仕事をあまり実感出来ずにいましたが、食を通して児童生徒の成長を支える大切な役割を持ち、非常にやりがいのある仕事だということに気付くことができました。また、栄養教諭になりたいという気持ちがさらに大きくなりました。今後は教育実習で学んだ経験を活かし、精進していきたいと思います。この5日間、大学では決して出来ない貴重な経験をさせていただき、忙しい中ご指導して下さった先生方、子どもたちに心から感謝申し上げます。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4回生

Ⅲ 田 智寿后

5日間の教育実習は、研究授業のみならず、実際に栄養教諭の方の食育の授業を参観したり、給食センターへ訪問したりと、栄養士として教師として大変密度の濃い貴重な経験をさせていただきました。実習を終え、学んだ事は山ほどありますが、特に学んだことは、

- I、「教師は演者」ということ
 - II、同じ内容でも授業作りにより、子どもの理解の深まりが変わること
 - III、大きなアンテナを持って、様々な角度から児童を見ること
- の3つです。

Iでは、児童を引き付けるための演技の必要性を感じました。指導教員から、「毎日何やってるんやろうって思うでしょ？」と聞かれ、演技をしつつ児童との向き合う大変さと難しさを感じておられるのだと思いました。IIでは、言葉のキャッチボールによる授業が理解を深めることに気付きました。IIIでは、些細なことでも相手に気遣いが出来たりと、人として当たり前の行動がとれているかを教師は見ています。その子の振る舞いを指摘することは、その子が良い・悪いお手本になり、なるべき人間性に皆を近付けると思いました。

私は、好奇心旺盛な子が多い3年生を担当しました。そして、研究授業では授業の難しさを改めて知りました。実習前は、うまく授業が出来るだろうかと正直自分の事でいっぱいでした。しかし、子どもと接し授業を参観する上で、自分の教材と教え方では興味を持ってもらえないと不安と焦りを感じ始めました。ここで初めて、児童の実態を把握する大切さを知り、授業は児童のためという考えが欠けていたと反省しました。私の問いかけに予想外な発言が返ってきたり、理解ができていない子へのフォローなどへの対応力が低い自分がいました。理解出来たかは子どもの反応やつぶやきで分かったと教えていただいたことは、本当にそうだと実感しました。

栄養教諭は児童との関わりは少ないですが、児童にとって授業は大切な時間で、受け持つ授業が少なくとも、その責任は大きいと感じました。だからこそ、授業前には学級の特徴をしっかりと把握しておくべきだと思いました。栄養教諭の先生の授業の特徴としては、普段の授業とは違い、ゲーム感覚で学べるものでした。子どもたちの反応は非常に良く、うつむいている子は1人もいませんでした。先生のような授業ができるようになりたいと、心の底から思いました。

子どもの感性には驚く毎日でした。自分が気付かない部分に気付いたり、鋭い目をしていました。きっと、一人ひとり授業の中で、自分なりの考えや疑問があったらと思うと思います。それをどれだけ拾うことが出来るかが本当に難しいところです。最終日に、ある児童が私が授業で教えた内容を覚えていて話してくれました。この時の嬉しさは言葉に表せないほどで、子どもに影響を与えられたのだという感動を覚えました。今回の実習により、教師の楽しさ・大変さの両方を学ぶ事ができました。これからは、「自分ならどうするか」を念頭におき、教師としての力をつけていこうと思います。

観察実習レポート

教育学科 2回生

小 沼 歩 実

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

初め行った時には、児童の表面的な可愛さ・素直さなどを感じ、私自身活動をさせていただく中で元気をもらうことが多々ありました。しかし、活動時間を重ねていくうちに、児童といえども一人の人間であるため、いい意味でも悪い意味でも人間らしさを垣間見ることが出来ました。そういったことを感じていく中で、やはり立場がどうであれ、教師であるからこそなおさら児童と接するときには筋を通して接していく必要があると思いました。児童は、少しでも疑問を持つとどんなことであっても追及してくる。だからこそ、ある意味、大人には通用することが児童には通用しない部分が多々ある。そこが教師としては接していくうえで苦勞するところの一つではあると思うが、そこが児童ならではの長所であるため、その長所を失くすようなことを教師がしてはならないと思いました。

②教師との関わりから得たもの

大学の授業で教師という立場に関して少し学んでいるつもりではありましたが、やはり実際目で見ると教師という仕事がいかに大変であるのか、いかに責任があるのかということに改めて感じた時間となりました。効率よく仕事をこなす先生方を見ると本当にその姿は素晴らしく尊敬できる行動ばかりでした。様々な人への気遣いが出来てこそ児童にも気を遣える。様々な可能性を考えて行動することが出来ないとこの職業に就くことはできない、そうも感じ、あまりの激務さに自分がやっていけるのか、かなり不安になりました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

学校という立場の低さを常々感じておりましたが、その場面に立たせていただくことで、より一層感じました。教育をする場である以上、限度はありますが、少なくとも威厳は必要であるし筋を通すことが出来るだけの立場を確保することは、教育をする上では必須であると思います。なぜ、あんなに保護者に対する立場が弱いのか。こんな状況ではきちんとした教育をすることは出来ない。無駄なところに気を取られたのでは時間ももったいない。体罰などが近頃問題となっているけれども、それはその教師・学校が問題であるだけですべての学校がそうではないのにあまりにも立場がなさすぎる。仕事量の多さ・教師不足など、学校の問題はかなり多く、また、深刻であると感じました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

特別支援学級に何度か行かせていただきましたが、人数の少なさ・広い環境・教師も充実しており、普通学級に比べたら、かなりいい環境であると思いました。児童一人ひとりにあった授業の進度に合わせて出来る、丁寧に接することが出来るため、児童との関係性も普通学級よりも密に接していくことが出来る。すごくいい学級であると感じました。しかし、普通学級と比べるとかなりいい環境である

と感じることが出来ていますが、まだまだ不十分であることもあるのだらうと思います。支援の仕方が一人ひとり違うため、児童の管理に関して、一層責任をもって接していく必要があると思いました。様々な場面に対しての対処の仕方を考え、事前に多くの知識を入れておくことも必要だと思いました。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

児童であっても一人の人間であること、自分なりの信念を持ち、絶対にぶれない芯を持つこと。

一つひとつの言葉に、いかに責任があるのかを常に考えながら児童と接していくこと。今回、活動をさせていただく中で知ったことを心にとめておきたいと思います。学校で起こった出来事を思い返し、もう一度同じような場面に出会ったときには以前より適切な対応ができるようにしていきたいと思います。保護者・児童との関係性を、今の学校の立場などを考えて築き上げていきたいと思います。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

時間が、交通手段などの関係によりはつきりとは読めないため、学校に迷惑をかけるわけにはいかず、時間が空いても学校に行くには難しい。

5. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

朝の全校集会で、じゃんけん列車ゲームという、じゃんけんをして負けた方が勝った方の肩を持って列車に見立ててどンドンじゃんけんをして列車を長くつなげるというようなものをしたときに、じゃんけんをする相手のいない児童、じゃんけんをしようと友達のほうへ行ったときにその友達に拒否されている児童の姿、また悪意を持ってじゃんけんするのを拒否してその児童を笑った時の何とも言えない醜い顔を見て驚きを隠せませんでした。なんて醜いことをするのか。友達をあざ笑ったときのあの顔は忘れられません。人間の醜さを感じた瞬間でした。そういったことに対して、自分はどんなふうに対処し気持ちをどんな方向へもっていくのか、を、よく考えていかなければいけないと思いました。子どもであっても大人であっても良い人間関係を築いていくことは難しく、子どもはまだ色々なことを知らないためすごく酷いことを簡単にやってのけるので、子どもの人間関係に関してもよく注意してみなければいけないなと思いました。

6. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

教師が児童との関係性をどこまで築き上げていくのかという線引きが大切だと思いました。

スクールサポーターの立場としてどこまですべきなのか、教師によって考え方が違うのでそこに合わせて感じ取っていくのもなかなか難しいし、先生方に気を遣わせてしまっていることに関しても申し訳なさを感じる。

観察実習レポート

教育学科 3 回生

齊 藤 友里華

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

1～6学年の児童との距離の詰め方の違い、注意の仕方を学ぶことが出来ました。低学年と関わるときは目線を合わせることに簡単な言葉を使うことを意識しました。また、全体的に気を付けたことは出来ることと出来ないことを見分け、サポートしすぎないことです。また、トラブルが起きたときに子ども同士の意見を通訳し、意見を相手に伝え、対処することを学びました。

②教師との関わりから得たもの

子どもが学校で見せる顔は、ほんの一部だということです。家庭ではどうなのか、また教室で勉強している時と運動場で遊んでいる時の顔は違うかもしれません。それを意識しておくことが、より確かな児童理解につながるということを教わりました。また、声の大きさ・話し方・テンポなど授業が飽きないように授業に波を作ることを先生方の授業から学びました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

ある児童が休むという連絡を聞き、他の学年の先生方も心配しているところを見て、学校全体で児童に関わっているということを学びました。クラスで授業を受けるのが難しい子と一緒に保健室で養護教諭の先生と勉強する時間に居合わせさせてもらいました。複数の先生で関わることで、その子の居場所を作り、さらなる児童理解に繋がるのだと思いました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

様々なクラスに行かせてもらい、たくさんの先生の学級経営を見ることができました。たくさんのクラスの朝の会を見て、各学級の個性を感じました。1年生の朝の会では、元気調べといって、1学期は先生が一人ひとりの名前を呼んで元気チェックしていました。2学期になると、係の児童が自分の班の児童の名前を呼んで元気チェックしていました。2年生以上は日番がスピーチしている学級がほとんどでした。ただスピーチしていたり、そのスピーチを聞いた後、質問タイムを設けていたり、そのクラスに応じて様々でした。高学年は、スピーチの聞き方が上手く、「共感しながら聞く」聞き上手さんがいっぱいいました。朝の時間は子どもの様子が一番表れる時間だと思うので、それを上手に利用し、子どもたちが気持ちよく1日の学校生活を送れるよう、教師として見守っている先生たちを見ることができました。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

自分が将来教師になったら、全学年に行かせていただいた経験をもとに、学年ごとに言葉のチョイスや指示を変えたいと思います。低学年には学習面はもちろんですが、生活習慣を身に付けてもらうとい

う目標があると思うので、授業を受ける姿勢・ノートの書き方・発表の仕方・掃除の仕方など学習面や生活面において、教育する必要があると感じました。また、高学年は発表をする子としない子が両極端に分かれるので、どの子も発表しやすいように発問のレベルを様々に設定し、どの子にも見せ場がある授業にしたいです。また、教師間のコミュニケーションが大切だということも学びました。担任になったら様々な困難が待ち受けていると思います。しかし、他の先生方と連携を図り、どう指導したらよいか分からない、保護者にどう接したらいいか分からない、など分からないことがあれば、学年団の先生や生活指導の先生にすぐに聞き、指導する上での先生方との共通理解をすることが大切だと思います。なので私は、先生になっても学び続ける教師になりたいと思います。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

後期は1日空いている日が取れず、半日だけのスクールサポーターになってしまいました。十分に時間が取れなかったのが心残りです。

5. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

音楽会の予行演習に行かせてもらったことです。私が行った小学校は、歌が凄く上手で、帰りの会や朝の会でも1曲歌うクラスが多いです。5年生の自然学校に引率させてもらい、最後に施設の人に歌のプレゼントをしていましたが、あまりに上手くて泣いてしまいました。なので、音楽会の予行演習に行けることを楽しみにしていました。各学年の個性が輝き、普段の学校生活で見る顔よりもずっとずっとたくましく見えました。高学年はさすがという感じで、体育館に響き渡る歌声は今でも忘れられません。指揮の先生方を見る眼差し、大きく縦に開く口を見ていると、どの学年も成長が感じられ、感動しました。

6. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

スクールサポーター2年目の今年、去年よりもずっと自分から動けるようになりました。体育の補助をさせてもらうことも多く、子どもたちがどうしたら上手くなれるか、一人ひとりの動きをよく観察しました。また子どもたちが喧嘩をしていると何があったのか、何が悪かったのか考えさせることに努めました。また、先生方に司書教諭の資格を取ることを勧められ、教師になってからのこともアドバイスを頂けました。今、このように具体的な動きが出来たのは2年目だからだと思います。授業が忙しくてなかなか学業との両立が難しかった面もありますが、今年も行かせていただいてよかったです。

観察実習レポート

教育学科 4回生

一木希未

1. スクールサポーターとしての活動から得たもの

①児童との関わりから得たもの

スクールサポーター4年目も同じ小学校にお世話になりました。4年目となると3年生だった児童が6年生なわけで、児童の成長を身近に感じる事が出来て本当に感慨深いものがあります。私が大学2年生の時に小学校2年生だった1人の男子児童がいました。その児童は当時、授業中歩き回り、叫び回り、いきなりCDを流し出したりして、授業の妨げばかりしていました。私も当時スクールサポーター2年目でそのような児童を見るのは初めてだったので、対応の仕方に悩んだこともありました。その児童が今年4年生になり、久しぶりにクラスの授業を見に行ったときに席に座って真面目に授業を聞き、算数の問題を1人で解く際には、「先生、ちょっと分からんから教えて。」と自分から質問してきました。嬉しさのあまり涙が出てきそうでした。教師のやりがいてこういうところにあるんだなと感じました。この感動をずっと忘れずにいたいと思います。

②教師との関わりから得たもの

来年から担任を持つことになるので、今年は徹底して先生方の授業の仕方や学級経営の仕方・掲示の仕方等を沢山学ばせて頂きました。常に、私がこのクラスの担任だったらどうするかということを頭に置いてサポートしました。また、席の座り方をどう決めているのかがすごく気になっていたもので、席の形や席順の決め方など意図していることを先生方に直接聞いたり、授業に集中できない児童の対応の仕方等を学びました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

学校というのは単体で成り立っているのではなく、学校・家庭・地域この3つが連携して成り立っているのだなと感じました。児童の校外学習の発表の場を設けて、地域の方や保護者の方に見に来てもらうことで、児童の学校の中での様子が分かりますし、地域の方も今、児童がどのようなことを学んでいるかを知ることができます。また、もっと手伝えることはないのかなど気にかけて下さり、協力の輪ができてくると思います。私も教師になった際には、そういった家庭・地域との連携を常に心掛けておきたいなと思いました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

学級経営の仕方です。特に6年1組の先生の学級経営の仕方はすごく心に響くものがありました。先生の言葉で、「みんなで頑張るから続けられる。頑張りを見える化するから、励みになる。自分が創りたい学級像を明確にイメージし、子ども達の意欲や関わりを高める工夫をしています。このように様々な場面で子ども達同士の関わりを意識し、繋ぐことをしています。学級では、いかに子ども達を繋ぐかだと思います。」という言葉が凄く印象的でした。学級内の後ろの壁に、一人ひとりの真剣に勉強して

いる写真を貼っていたり、自主勉強ノートをタワーのように積み上げて行って学級全体で数を数えることで、児童の努力が目に見えるような工夫をしていました。是非取り入れていきたいと思います。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

来年からは、私も教壇に立つ身になります。この4年間のスクールサポーターの経験は私の財産です。

大学生の間に現場を見ておくのと見ておかないのでは大きく違うと思います。特別支援学級の児童との関わり方・学級経営の仕方・授業のやり方・児童との話し方・怒り方等スクールサポーターで学ぶことはたくさんありました。また、学年によっても言葉の問いかけ方は全く違いました。1年生と6年生では、話し方・説明の仕方・授業の仕方は、もちろん全く違います。しかし、目指している場所は同じです。子どもの目線に立ち、子どもたちのために何が出来るのかを常に考えることで、児童からの信頼も得ることができるのかなと思いました。春からの生活に凄く不安もありますが、それと同時に期待もあります。4年間のスクールサポーターで学んだことを今度は自分の学級で還元していきたいと思います。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

4回生になると教員採用試験があり、それどころではなくなってくると思います。しかし、そこで辞めてしまうのは勿体ないと思います。4回生が終わると春からは自分が教壇に立つ身になります。だからこそ、ぎりぎりまでやって現場の雰囲気を感じていた方がいいかなと思います。前期から無理なら後期から始めた方がいいと思います。私も実際にそうしました。小学校の先生方も春から教壇に立つ身だと知って下さっているので、「〇〇なことやっておいた方がいいよ。」とか、今までは、6年生に入ることが少なかったのですが、6年生のクラスに入らせてもらって、行事と行事の間の児童の中だるみをどう担任の先生が改善していくか、その方法や言葉がけを注意して見ておいてとアドバイスをたくさん下さいました。

5. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

児童音楽会での出来事です。音楽会の練習の仕方・音楽会までの朝の会での声出し練習・口の開け方・指揮の仕方など、普段の授業では見られない先生方の姿や児童の姿を見ることが出来ました。児童が一所懸命に楽器を弾いている姿や、大きな口で大きな声で合唱している姿は、心にぐっとくるものがありました。それは普段の姿ではない部分が見れたからというものもありますが、4年間続けてこなかったら得られなかった感動でもありました。教師という仕事はその時に児童から返ってくる場面というのは少ないのかもしれませんが、しかし、何年も何十年も経って返ってくるものはすごく大きなものなのだと思います。この感動を絶対に忘れないでおこうと思いました。

ボランティアを通して学んだこと

教育学科 4 回生

田 所 未 央

ボランティアを通して学んだことは、子どもの気持ちを理解することと、一人ひとりに合ったかかわり方の大切さです。

私は夏季のアルバイトからその保育所でボランティア活動をさせて頂いており、主に3歳児のクラスに保育補助として入らせて頂いていました。そのクラスは全体的に発達年齢が低く、中には発達支援を要する子どももいました。そのため、保育者による援助が重要となりました。そのようなクラスでの保育補助に戸惑うことが何度もありました。

例えば、子ども同士で玩具を通して遊んでいて、自分の思うように遊べなかつたりすると言葉で表すことができず、すぐ手を出してしまうことが多く見られました。初めてその光景を目にした時に、私がなぜ手を出してしまったのか問いかけても子どもは興奮状態であったため、反応せず不満そうな表情を浮かべていました。その時に保育者は子どもの様子を見て、まず子どもの気持ちを落ち着かせるように「…して遊びたかったんだね。」と寄り添うような言葉掛けをしていました。すると子どもは気持ちが落ち着いたので、保育者の言葉を黙って聞いている様子でした。その後に保育者に見守られながら相手の子どもに「ごめんなさい。」と手を出したことについて謝っていました。このような出来事から保育者が子どもの気持ちを理解して寄り添うことで、子どもが安心して見られました。

またボランティアを通して、保育者の方から様々なお話を聞くことがあります。その内容はクラスの子どもの発達状況や、その子どもに合ったかかわり方などです。その話を聞いて、保育者が日頃の子どものかかわりから常に気持ちに寄り添い、理解しようとしている様子を感じられました。さらに一人ひとりの発達状況を把握していることから、一人ひとりが成長できるように、子どもに合ったかかわり方をしている様子も感じられました。

このような保育者のかかわり方から、私も子どものかかわりで戸惑う前にまず子どもと向き合い、気持ちを理解することを心がけてきました。すると子どもも応じてくれるようになり、少しでも子どもの気持ちに寄り添うことができた嬉しく思いました。

ボランティアでは長い期間子どもとかわることができ、実習とはまた違い子どもと様々な経験ができてとても学ぶことがたくさんあります。この学んだ経験を活かして、将来保育者として子どもの気持ちに寄り添えると共に一緒に成長していきたいと思えます。